

地域づくりは面白い。地域を学び、地域で遊ぶためのヒューマンネットワークマガジン

かがり火

旅に出るなら、
「かがり火」を忘れずに
持っていきなさい。
生涯忘れられない、
素晴らしい人たちとの
出会いが待っている。
“人生は楽しき集い”



129 2009
March

日本にあった美しい精神

森田 秀巳(島旅専門誌『島へ。』編集長)

新しい時代を切り開く “連帯”の輪を築きたい

兼頭 一司(愛媛県上島町)

北海道帯広市を元気にした 「北の屋台」は大繁盛

ロングインタビュー
哲学者・内山 節氏

平成の大恐慌を どう生きるか





「合併のマイナスよりもプラスを見ていきたい」という田中さん。



合併市・紀の川市の

現場から

『紀の川のほとりで』

紀の川市理事・農林商工部長

田中卓二

（たなか たくじ）1965年、大阪府吹田市生まれ。87年、京都大学農学部卒業、同年農水省に入省。鹿児島県末吉町、農村振興局等を経て、紀の川市勤務。

『紀の川のほとりで』

「紀の川は今日も流れ

幾つもの川を集めて

君はまだここに

僕たちの心の中に…」

平成21年2月14日、「紀の川市ピンクリボンキャンペーン」の一環として行われた講演会で、地元の小学生が歌ってくれた『紀の川のほとりで』という歌の一節です。母なる紀の川の悠久の流れなどを題材にしたこの歌に、紀の川市の子どもたちが命を吹き込んでくれました。

私は、赴任先や仕事で深い縁のできた土地で曲作りをすることをライフワークとしています。鹿児島

島では「からいも畑に陽が落ちて」という村おこしの歌を作り、宮城では「ふゆみずたんぼの歌」という環境にやさしい農業のテーマソングを作りました。『紀の川のほとりで』は、紀の川市が誇る医聖・華岡青洲が、世界で初めて全身麻酔薬による乳がん摘出手術に成功したことなどを踏まえ、乳がんを乗り越えて強く生きていこうというメッセージを織り込んで作った曲です。市内の乳がん検診率を上げ、乳がん撲滅を図る「紀の川市ピンクリボンキャンペーン」のテーマソングにさせていただきました。『ふゆみずたんぼの歌』も、宮城の小学生にレコーディングしてもらったのですが、『紀の川のほとりで』も、青洲先生地元の上名手（かみなて）小学校の生徒さんをお願いして講演会で歌ってもらったわけです。

■「果物王国」紀の川市

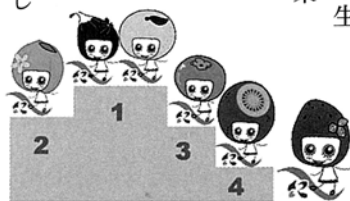
紀の川市は、和歌山県北部に位置する人口7万人の市です。県都の和歌山市に隣接し、大阪府とも境を接していて、関西国際空港に車で40分ほどです。基幹産業は農業で、ハッサク、イチジク、桃、柿、キウイフ

ルーツが全国有数の生産高を誇るなど「果物王国」とも言うべきところです。

私は、平成19年4月、農林水産省から紀の川市に赴任しました。いったん国へは辞表を出しての出向ということになります。ひそかに運命的なものを感じたのは、まだ入省間もないころ、鹿児島県末吉町役場への市町村交流を経験していたので、市町村の現場に出るのが2回目だったことと、末吉町が平成17年7月に隣の2町と合併して曾於市となっていたのと同様に、紀の川市も平成17年11月に旧那賀郡5町（旧打田町、旧粉河町、旧那賀町、旧貴志川町、旧桃山町）が対等合併（新設合併）してきた「合併市」だったことです。

もともと、「かがり火」と同様、私も「平成の大合併」についての関心は強く持っていました。末吉町のかつての仲間たちからは合併の選択は苦渋のものだったということとを聞かされていましたし、農林水産省の補佐時代に交流のあった棚田地域の方々の活動が、市町村合併の結果、明らかに失速してしまった状況を目の当たりにしていました。

紀の川市という合併して間もない市の現場に赴任し、職員として自ら合併市のまちづくりに参加できるチャンスを与えられたわけですから、ありがたいという思いと併せて、強く責任を感じたところです。



フルーツキャラクターの「紀の川ぶるぶる娘」。紀の川市は、ハッサク、イチジクは全国1位、桃は2位、柿は3位、キウイフルーツは4位。

コマすべてが埋まっている。それどころか、待機組もあるぐらいの人気になった。

現在は1店舗だけ2コマを使用している、全19店舗。創作串揚げの「北のまる源」、無国籍料理の「えん」、農家さんの屋台の「農屋（みのりや）」、そば居酒屋「福里」、とかち山海料理「サムの店」、ブラジル風居酒屋「ランシヨネッチオブリガータ」、韓国居酒屋「ましっそよ」、飲茶専門「飲茶のパオズ」、海旬遊家「創屋（つくりや）」、おふくろの味「お多幸」、チーズ・生ハム「プチ・プレジール」、やまべ料理「綾乃」、魚介居酒屋「こころ」、串揚げ料理「ホッとかめちゃん」、ラーメン「楽屋」、おばんざい・馬肉料理「ひでちゃん」、鉄板焼居酒屋「へんてこりん」、串焼き「串のやつさん」、地鶏料理「うさぎのしっぽ」である。

各屋台からは毎月の売り上げを組合に報告してもらっているが、個別の店の売り上げは公表していない。代わりに全店舗の合計額はオープンにしている。

「いちばん最近のデータは、一昨年の8月から昨年の7月までの1年間のものですが、約3億円です。各店には、その金額を割って平均額を算出して、平均の上か下か判断してくださいと申し上げております」

平均すれば1店舗当たりの売り

上げが1500万円以上である。

どの店も一人か、家族経営だから人件費もかからず、かなり効率的な経営をしていることになる。何しろ満席になっても10人〜15人の店としては、この金額は立派なものだ。

北の屋台では、それぞれの店は集客のための宣伝をする必要がなく、営業に専念できる。久保さんは、屋台に人を集めるのは組合の仕事だという。

「店主はチラシを配布したりせず、あくまでもおいしいものを提供してくれればいいのです。われわれはそのためにも共益費をいただいております、それでホームページを作成したり、地図を作ったり、行政に働き掛けたりして総合的に集客力を高めるようにしています」

ちなみに出店する時は、家賃と共益費以外に出店料として20万円と保証金100万円が要る。

「保証金は退店時には全額お返しするものです。出店料は出店者が入れ替わる時に店内の改装や修復をするための費用です。もし、市内に店を出そうとしたら、とてもこの予算では出せるものではありません。ここでは前家賃も入れて130万円で済むのですから、人気が高まる一方です」と久保さん。

出店者の中には、屋台で資金のため、固定客をつかんで市内に店舗を借りて移っていった人もいますということだ。

全店の料理を 出前してくれる

帯広市には、同じ北海道でも、阿寒湖や摩周湖、定山溪や旭山動物園などといった全国区の観光名所がない。北の屋台は、「十勝のおいしいものを食べたい」という観光客にとつての格好のスポットとなった。帯広市民も、本土から来たお客さんを手軽に案内できる店ができて喜んでいいる。しかし最も大切なのは、地元の人たちの支持がなければ、長続きしないということである。

さて、こちらで北の屋台に足を運んだ人の感想を聞いてみなければなるまい。いずれも本誌支局長である北海道滝川市の水口正之さんと下川町の谷一之さんに尋ねたところ、二人とも開口一番、「屋台にしちゃ高いんだよ」ということだった。

久保さんは説明する。

「屋台は安いものという先入観のある人にとっては、確かに高いかもしれません。しかし、一般のお店と比べれば決して高くはないんです。この屋台はもとと安さを売り物にするのではなく、十勝の優れた食材の旬の味を食べてもらうという趣旨で始めたものですから、安いだけの店から仕入れられたら困ります。実は、十勝は野菜でも魚介類でも一級品は全部本土に送られてしまつて、地元の

人たちの口に入らないという現象がありました。ですから、特に仕入れには気を使つてもらつています。お客さんがたまたま入った店がまずかつたり、サービスが悪かつたりしては、北の屋台全体の評判を落としてしまいます。私は、19軒のお店がどこから野菜や肉や魚介類を仕入れているのかすべて教えてもらつて、チェックしているんです」

北の屋台にはもう一つ、ほかではまねのできない特長がある。どの店にいても、他店のメニューを届けてもらえることだ。

「例えば、おふくろの味『お多幸』さんで、しまホッケ焼き（840円）や煮込み（630円）、長芋のかき揚げ（530円）などで飲んでいて、さて帰りがけにラーメンでも食べたいと思ったら、『楽屋』さんが、しょうゆラーメン（630円）でもザースン麺（ザーサイと筍とチャーシューをのせた塩ラーメン・730円）でも届けてくれるんです。仮に1店舗に20種のメニューがあるとすれば、居ながらにして19店舗380種類の料理を楽しむことができるというわけです」

北の屋台は全国から視察が絶えない。帯広市に刺激されて愛媛県の松山市、青森県の八戸市、栃木県の宇都宮市、福島県の福島市で同じような屋台がスタートした。「われわれ当初の設立メンバーは

あくまでも地域づくり、衰退するまちを何とかしたいという思いで始めましたから、現在もいろいろな形で地域の活動に参加しています。私は4年前に組合の専従になつて本業の旅行代理店を畳みましたが、給与は得ていますが、精神はあくまでも利益追求ではなく地域振興です。おかげで北の屋台に来たお客さんが満員で入れず、周辺の居酒屋に流れていくケースもあり、波及効果が広がっています。

また北の屋台に刺激されたのか、市内各所で目立っていた空き店舗を借りて商売を始める人が増えてきて、数字には表れない地域貢献をしていると思います。夜の街が元気になるれば、昼の街にもその元気が伝わるようで、以前ほどの空き店舗は目立たなくなりました。

北の屋台の果たした役割は結構大きいのではないかと自負しています」と、久保さんは胸を張るのであった。

大規模開発や大型投資を行うよりも、これからの地域経済はこのような等身大のビジネスのほうに可能性のあることを教えているようである。

■北の起業広場協同組合

〒080-0012
北海道帯広市西2条南10丁目2-7 DOビル2階
TEL 0155・23・8194
FAX 0155・23・8193
mail info@kitanoyatai.com



わかやま電鉄貴志川線の「たま電車」が3月21日に運行を開始。猫のスーパー駅長「たま」をテーマにした電車で、子どもたちに大人気です。

■離婚できない結婚？

前述のとおり、紀の川市への赴任前は合併について否定的な見方をしていたのですが、紀の川市に赴任して2年たち、市の行政に携わる中で、合併を肯定的にとらえていく必要もあると考え直すようになりました。地方交付税の削減や合併特例債という国からの財政的なプレッシャーが紀の川市の合併の直接の動機付けになったことは間違いないですが、若

い市民や市職員を中心として「合併してよかった」と肯定的な意見を持つ人が少なくないのです。

今回、本誌発行人の菅原さんから「合併市町村の課題」について寄稿の依頼があり、合併について自分の考え方をまとめるいい機会だという思いもあって快諾しました。ところが、7500

字もの原稿をせっせ

と書き上げて送ったものの、菅原さんから原稿の全面書き直しを命ぜられてしまいました。「田中さんは、本当は合併の否定論者なのに立場上否定できないので、歯切れが悪くて面白くない」とのこと。

私がもともと合併の否定論者であったことを拒むものではありません。曾於市の住民にしても紀の川市の住民にしても、でき

ることならば合併したくなかったと思います。誰よりも私自身が、末吉町での青年団長経験なども踏まえて、小規模の自治体の良さを十分に理解しています。

ただ、菅原さんにも「かがり火」の読者にも分がっていただきたのは、紀の川市にとつて「合併」は既に選択してしまった事実であつて、経緯はどうであれ、合併を否定することは自分自身を否定するにも等しいことなのです。合併した選択は後戻りできるものではないし、何よりも、合併を選択しなかった市町村に負けたくないという思いも強くあります。例えて言えば、「離婚できない結婚」をしたといったところでしょうか。

もちろん、紀の川市の合併によつて傷ついた人もたくさんいますし、いまだに一部の市民から「合併しないほうがよかった」という声があるのも事実です。しかし、住民には目につくにくい「合併の大きな効果」があることは、分かつてもらいたいと考えました。そういった観点から書いたものだというので、お許しいただきたく思います。

■このままでは、とてもやっていけない

紀の川市は、なぜ合併という選択をしなければならなかったのでしょうか。そもそも、各町には、それぞれ地域で築き上げてきた個性・歴史があります。お互いに隣町に負けないようにと張り合ってきたわけですから、突然共通のアイデンティティーを持つてと言われても、容易なことではありません。でもなぜそういった困難を乗り越え

て旧5町が合併しなければならなかったのでしょうか。

理由は単純といえば単純で、地方交付税などが削減される中、「このままでは、とてもやっていけない」という財政上の課題が合併の大きな動機付けになったようです。実際、5町の財政状況を合併した場合としない場合に分けてシミュレーションしたところ、合併しない場合は建設事業などを抑制しても、平成20年度には基金（預金）が底を突く非常事態にありました。一方、合併した場合には、合併による経費の削減や合併特例債など特例措置の効果により、財政的に非常に有利となるわけです。

もちろん、合併についての不安もありました。合併前、5町合併に関して各町民に対してアンケートが行われています。合併についての不安の第一は、「きめ細かな行政サービス」が難しくなるのではということでした。その他、役所への距離が遠くなり不便になるのではということや、公共料金などの増加についての懸念も示されました。また、合併の実務を進める中で大きな問題となったのは、市庁舎の位置と各町の財政上の格差でした。これは対等合併の市町村の場合、特に問題になることが多いようです。ただ、財政状況の良かった旧打田町が地理的にも中心だったことから、市役所本庁を旧打田町役場に設置するということが合意することができました。

■市民には見えにくい「合併の効果」

合併の動機付けが各町の財政上の苦境だったことは間違いありませんが、合併によ

2月14日の「乳がん検診啓発講演会」で、上名手小学校の皆さんが私の作詞作曲した『紀の川のほとり』を歌ってくれました。



って市民には見えにくい「合併の効果」が出てきていることも事実です。思い付くまま、4点ほど列挙してみたいと思います。

第一は、旧5町職員の切磋琢磨です。旧

5町の対等合併だったということもあり、職員がいい意味で競い合い、刺激合って、結果として市民サービスの向上につながっています。市民から「合併して役場の職員の対応が良くなった」という声をよく聞きます。

第二は、行財政改革の進展です。合併を機に市役所の行財政改革が一挙に進みました。10年間に約700人の職員を約500人に減らす計画を立てるとともに、緊縮財政方針を打ち出し、不必要な経費を削減しています。また、市議会議員も市発足時には法定の30人からスタートしたのですが、次回の選挙（今年11月予定）では、24人定員とすることが決まっています。

第三は、過去の負債の清算です。旧町の土地開発公社の中には、バブル期に高い土地を買収したまま塩漬けとなり大きな負債を抱えているところもありましたが、合併後の最重点施策として公社の財政健全化を進め、効果を上げつつあります。自治体財政健全化法が施行され、

公社や第三セクターなどの連結決算が厳しく査定されるようになる中で、合併がなければ旧町の公社の一部は破産状態に陥っていたでしょう。

第四は、重点投資が可能になったことです。例えば、平成21年度新規予算で、雇用確保の観点から新たな工業団地造成を打ち出しましたが、これも広域合併をして重点投資が可能となったおかげです。その他、中国の濱州市や韓国の西帰浦市と行っている国際交流事業も、合併しなければ取り組み自体難しかったでしょう。小中学校の耐震化についても、合併特例債を有効に活用し、順次、校舎の補強や建て替えを進めています。

■市民主体のまちづくり

紀の川市内で、合併前後から市民主体のまちづくりが展開されています。紀の川市のまちづくりを幾つか紹介させていただきます。

（1）廃線の危機を乗り越えて

貴志川線貴志駅の猫の駅長「たま」ちゃんと言え、全国ネットのテレビで紹介されることも多く、読者の方でご存じの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。実は、この線路も一時期、廃線の危機にありました。平成16年に貴志川線の廃線が発表された時、

「貴志川線の未来を『つくる』会」が結成され、地域で存続活動を繰り広げた結果、わかやま電鉄貴志川線として再出発することになったのです。わかやま電鉄では、「いちご電車」、「おもちゃ電車」に続き、3月21日に「たま電車」も運行を開始し、乗降

客数も確実に増えています。駅前では「いちご自転車」のレンタサイクルの貸し出しも始まっていて、住民主体のまちづくりの成果が実りつつあります。

なお、貴志駅のスーパー駅長「たま」ちゃん、日曜日が休みとなっていますので、あしからず。

（2）粉河商店街を彩るモニュメント

西国三十三カ所観音霊場、第三番札所の粉河寺のことをご存じの方は多いと思います。しかし、この粉河寺と粉河駅の間にある粉河商店街、通称「とんまか通り」は、後継者不足などにより閉店する店も多く、活気を失いつつありました。こういった状況を打破し、駅から粉河寺に向かう参拝客に商店街を歩いてもらうにはどうすればいいのか。地域の商店主を中心に実行委員会を立ち上げて検討を重ねた結果、商店街を彩る数十個のモニュメントが作られることになり、この3月に完成しました。モニュメントには粉河寺の創建の経緯が書かれた「粉河寺縁起絵巻」が転写され、駅から順に見て歩くことができます。千手観音の化身であるという「童男（どうなん）さん」の像もシンボルとして2体設置されています。ぜひ、粉河の「とんまか通り」に足をお運びください。

（3）華岡青洲の生誕地から発信する健康バイキング

華岡青洲は、文化元年（1804年）、全身麻酔薬による乳がん摘出手術に世界で初めて成功した偉人です。この青洲先生を顕彰する施設として「青洲の里」が平成になつてから建設され、運営されてきました。しかし、開館当初と比べて入場者数が伸

「青洲の里」の健康バイキングの風景。地場産野菜のヘルシーなメニューが大人気です。定休日は火曜日、お問い合わせはTEL0736・75・6008へ。



び悩んできた中、新たな取り組みにチャレンジしようとスタッフで検討を重ね、平成19年3月から「健康バイキング」に取り組みことになりました。地元産野菜を中心としたヘルシーなメニューが話題となり、春夏のピーク時には常に満席状態になるなど人気を呼んでいます。医と食の連携という観点からも注目を集める取り組みです。

（4）地産地消の拠点・めっけもん広場

紀の川市には、日本一の農産物直売所である「JA紀の里」めっけもん広場があります。平成13年の開設以来、販売高は順調に伸び、年間売り上げ26億円を達成しています。農産物一つひとつに農家自身が値段付けをして、販売コーナーでの陳列も農家自身が行うなどの工夫が行われ、新鮮な地元産の農産物が安価で買えると評判を呼んでいます。大阪や神戸からの来客も多く、週末は駐車場が常に満杯の状態です。4月からは、地元産の野菜や果実を味わえる「イートインコーナー」もオープンする予定です。

（5）「食育のまち」紀の川市へ

紀の川市では、県下1位の農産物の生産高を誇るだけでなく、環境保全型農業など安全・安心な農産物づくりに取り組む農家もたくさんあります。また、学校給食に地

場産の農産物を取り入れるなどの取り組みも熱心に行われてきました。このように「食」に対する関心が市民一般に高いことから、平成20年に「紀の川市食育推進計画」を策定して、市を挙げて食育を推進しているところです。今後、めっけもん広場や青洲の里などを拠点として、「食育のまちづくり」を展開していきたいと考えています。

■行政に頼らない地域づくりへ

考えてみれば、行政に頼らない市民主体のまちづくりを進めてきた地域では、行政が合併しようがしまいが、さほど影響は受けません。市町村合併は、各地域の行政依存からの脱却のチャンスとも考えられます。ただ、私が心配しているのは、合併による市の行財政改革を急ぐあまり、旧町で培ってきた地域の文化が廃れてしまうことです。例えば、小中学校の統廃合は効率的な投資という観点からは必要なものですが、小中学校が地域文化の拠点として機能してきたという面もあります。このため、統廃合を行う場合には、地域の意見を尊重するのはもちろんですが、廃校となった後の学校の活用をどうしていくということも併せて検討しなければなりません。

また、地方への権限移譲の名の下に、県から市に多くの事務が移管されようとしています。もともと「このままではやっていけない」ということで合併したわけですし、職員も減らさなければならぬ中、紀の川市のような地方の新設合併の市には新たな業務に取り組む余裕はほとんどありません。都道府県と市町村の関係の見直しは必要な

ことですが、市町村への業務の一方的な「押し付け」にならないよう配慮してほしいと思います。

■ふるやびんぐの「抱」

紀の川市は、紆余曲折はあったものの、市長の指導力、市議会議員の協力、市職員の意識の高さなどさまざまな要素がかみ合い、合併がうまくいったと言えます。しかし、本格的なまちづくりはこれからです。

合併に至った「初心」や合併に伴う「痛み」を忘れることなく、新しい紀の川市づくりにチャレンジしていかなければなりません。よりよいふるさとをつくるためには、市民一人ひとりが高い「志」を持つことが肝心ではないでしょうか。

私自身も、紀の川市の職員提案制度に挑戦し、ブログ形式で市政を分かりやすく情報発信する市職員ブログ「紀の川ふるる通信」を立ち上げることができました。農林商工部の職員の協力を得て、気軽な読み物として人気を集めています。ぜひ、一度、<http://blog.murabo.jp/purupuru/>にアクセスしてみてください。

合併して間もない紀の川市の課題は山積していますが、私は、国や県の立場ではなく、より現場に近い市町村の立場で農業をはじめさまざまな課題に携わることができ、大変やりがいを感じているところです。このような貴重な機会を与えていただいた中、村市長はじめ紀の川市の関係の方々と、いつもお世話になっている岩崎議長はじめ市議会議員の方々に感謝申し上げ、筆をおきたいと思っています。